

第2章 銃後

札幌空襲②

恐ろしい思いをした空襲

おくむらてるかず
奥村輝一さんのお話から

私が生まれたのは昭和十一年（一九三六年）でした。終戦時、私は小学校三年でしたが、ちようどお盆でお墓参りに行ったときに「今日天皇陛下からお言葉があります。」ということ
で農家の家でラジオを聞きました。それが、天皇陛下の玉音放送で、日本が戦争に負けました
という終戦宣言というものが出来、戦争が終わったのです。

日本は大東亜戦争の前に中国やロシアと戦って勢いがよかったので、戦争の始めのころは、
領地を広め、いろいろなところの資源も自由に使えるような力を持っていました。戦争も有利
に進めていたのですが、日本は小さな島国で大国と比べたら資源が全然足りませんでした。そ
れで、だんだん劣勢になり、サイパン島、アッツ島、アリューシャン列島などでは玉砕とい
うことで皆が死に、島が取られてしまったのです。

そして、いろいろなものが不足して、特に鉄資源が少なくなつたので、一般家庭から鉄瓶、
やかんなど、いろいろな鉄製品が没収されました。学校の二宮金次郎の銅像も戦争のために国
に没収されてしまいました。

集めたものは、飛行機、軍艦、鉄砲の弾などに使われるということで、戦争に負けないう
にがんばって、みんなで努力したのですが、やはり負けてしまいました。

今は食べるものが豊富で、ガムでもチョコレートでもお菓子でも何でも食べられます。でも
その当時は、食べるものがほとんどなくて、主食となるものはカボチャ、芋、トウモロコシな
どが中心になっていたし、おやつなどは全く買えず、食べられませんでした。

○大東亜戦争 日本は、
アメリカ、イギリスとの
開戦後、それ以前から継
続中だった対中国戦争を
含めて「大東亜戦争」（大
東亜とは東アジア、東南
アジアのこと）とよんだ。
○玉砕 玉のように美し
くだけること。全力で
戦い戦い、潔く死ぬこ
と。当時はそれが名誉・
忠節を守ることとされ
た。

終戦後は、アメリカの兵隊、当時は進駐軍しんちゆうぐんといっていました。その兵隊たちがバス通りを中心にジープで遊びに来て、私たちのような鼻垂らし小僧こそうにガムやチョコレートますをくれました。貧しかったので大変うれしくて、どうして覚えたのかわからないけれども、「サンキュー」という言葉をつかって、アメリカ兵によく覚えたねと褒められた記憶も残っています。

本当にそのころは貧しくて、ご飯も十分に食べられなかった。みんな栄養不足でした。

それから、衛生的えいせいにも非常ひじょうによくありませんでした。戦後せんごのことで、お風呂もそんなに十分には入れないので、シラミという虫が大発生し、みんなが困りました。そのような嫌な思いをした経験けいけんもたくさんあります。

また、戦争中は札幌にも戦闘機せんとうきが来たので、ねらわれては困るこまということ、灯火とうか



イメージ図

管制かんせいという命令が国から出だされました。それは、夜になると明かりの見える家が重点的に攻撃こうげきされるので、明かりをつけないでくださいということでした。どうしてもつけるときは、昔は電気がなくて、ランプを使っていたのですが、ランプの傘かさに黒い布ぬのをかけたか、黒いカーテンにしたりして、明かりが漏もれないようにしないといけないということで、みんなよく守りました。

そして、学校へ行くときに攻撃こうげきにあった場合は困こまりますので、三角頭巾さんかくずきん、防空頭巾ぼうくうずきんという綿めんを入れた三角の帽子ぼうしを作り、それをかぶって学校に通いました。

それでも、また一段いちだんとアメリカ兵が日本に押おしかけてきて、たくさん弾たまを撃うつのです。戦闘せんとう機きが低空飛行して一般いっぱんの市民を撃うつのです。それこそ地上から二十メートルくらいのところまで下がってきて、火花とともにババババッと撃うつていく。そのような恐おそろしい攻撃こうげきの様子を、ちやうど皆みなさんと同じくらいにのこるに畑えんがわや縁側えんがわで見みていました。

子どもたちに弾たまが当たって、その人がどこの



イメージ図

防空壕づくり

○防空壕 航空機による
空からの攻撃から身を守る
ためにつくった穴や地
下室。

だれか分からなかったら困るので、学校に通うときには木の名札に名前と血液型、住所、年齢を書いてそれを下げて通いました。

当時は、防空壕という穴を家族みんなで力を合わせて掘りました。大きさは六畳間か八畳間くらいで、そこには少々の水と食べ物と寝起きできる布団を入れておいて、機銃掃射をされたときや警戒警報が出されたときに、そこに入って隠れました。そのような恐ろしい思いをして、小さくなって、夜も家族が丸くなって寝ていたのです。

戦争は絶対にしてはいけません。原子爆弾や水素爆弾を使ったら、地球がもつともつと壊れていくような気がします。私たちも戦争には反対しますし、二度と戦争の起きないような国にしていきたいと思っています。

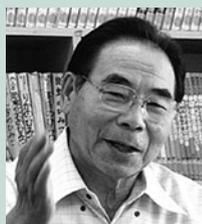
ある小学生が平和への言葉を次のように作文でつづっています。
「平和な世界になったら、差別もなく、国のために命を落とさずにすむ。そして、何よりすべてのことが幸せに感じられる。一人一人がこのような世界を目指したら、一秒でも早く平和になれる、そんな気がする。世界の人々とみんなで平和を願い、考えましょう。」

私も本当にそう思いますし、皆さんとともに、戦争が二度と起きないように、いろいろと勉強したいと思います。そして、皆さんが平和の中ですくすく育っていたたく姿を楽しみに見守りながら生きていきたいと思っています。

DATA

平成22年度白石区平和事業
聴き取り

- ・平成22年8月10日
- ・菊水元町児童会館



奥村輝一(おくむら・てるかず)さん

- ・昭和11年(1936年)生まれ
- ・札幌市白石区在住

恐ろしい思いをした空襲